

先進技術の導入と‘美味しまね認証’取得によるメロン産地の活性化

西部農林振興センター県央事務所農業普及部大田支所

1 普及活動のねらい

- 大田市温泉津町では、以前から水稻や肉用牛を主体とする農業経営が行われているが、昭和 50 年代からは、その経営を補完あるいは先導する品目としてメロンが導入され、経営の複合化がより一層進んだ。
- しかしながら、そのメロンもピーク時に 30 戸あった生産農家が、高齢化等により平成 22 年度には 10 戸に減少するなど、産地の維持そのものが難しい状況となった。
- そこで、地域を守り、継続してこの地域で暮らしていくためには、やはり「水稻」、「肉用牛」、「メロン」を組み合わせ、いわゆる中山間地域「温泉津型複合経営」の維持、拡大が必要と考え、メロンにおいては、産地、関係機関一体となって、新技術の導入等による安定生産や担い手の確保・育成に積極的に取り組むこととした。

2 主な普及活動の内容

(1) トロ箱栽培の安定生産

平成 22 年度から省力化や収益性向上を目的として島根県が開発した「移動型少量培地耕（通称「トロ箱栽培」）」を導入しているが、導入から数年が経過し栽培上の様々な課題が生じてきた。

そこで、実証ほの設置や温泉津版栽培指針の作成、タブレット活用による技術指導等により、原因究明や対策の策定等に取り組んでいる。

【栽培管理】（子づる2本仕立て、FRアムス）						
生育ステージ	播種 鉢上げ	定植 ～2枚	2～4枚 編組	子づる2枚 2本編組	子づる 2～3枚	子づる 8～12枚
写真						
日射照定値	—	0.2 (8時)	0.15 (8時)	0.1 (8時)	0.08 (8時)	0.07 (8時)
子タイム	—	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
乾燥定値	—	0.3%	0.6%	0.6%	0.7%	0.9%
最高温度		25～28℃	25～28℃	25～28℃	25～28℃	25～28℃
最低温度		14～16℃	14～16℃	14～16℃	16～18℃	16～18℃
サイド射光		28℃	28℃	28℃	25℃	25℃
特記事項	サーモの温度管理に注意。播種：30℃発芽：25℃	水温 15℃以下。マルチ紐はなし。	トンネル設置。準備で通常の暖房。編組が壊れないよう注意。	子づる 5～10cm頃に2本編組。誘引準備。	つる先を挿入して選れないよう立ち上げ。誘引。	誘引選れに注意。編組を壊さないよう立ち上げ。灌水管理。

図 1 温泉津版栽培指針（抜粋）

(2) 担い手の確保・育成

「ご縁の国しまね」就農相談バスツアーや各種就農フェアに参画し、生産農家、関係機関と連携して新規就農者の確保に取り組んでいる。また、認定新規就農計画の作成支援や、農業士等での就農前研修の調整や研修中の技術・経営指導など、関係機関と連携した担い手育成に取り組んでいる。

(3) 美味しまね認証の取得と販売 PR

近年の消費者の食の安全・安心への関心の高まりを受け、メロン生産農家に対して GAP の意識づけを行うとともに、‘美味しまね認証’取得に向けて、西部農林振興センターと連携した現地確認、指導を行っている。また、認証取得メロンの販売 PR を産地、JA 一丸となって行っている。



図 2 現地審査の様子（美味しまね認証）

3 普及活動の成果

(1) トロ箱栽培の導入と安定生産

トロ箱栽培を導入したことにより、年 3 作（春作メロン＋秋作メロン＋レタス）が可能となり、高収益が望める新たな経営モデルによる担い手募集が可能となった。また、栽培における様々な課題については、実証ほの

設置や、タブレット端末を活用した指導等により、その解決に向けて取り組んでおり、徐々にではあるが着実に安定生産が図られつつある。

(2) 新たな担い手の確保

産地の新たな担い手として、表1のとおり3組の認定新規就農者が誕生した。

表1 新たに誕生した認定新規就農者の概要

	就農形態	研修先	経営類型	就農開始時期
T夫妻	1ターン	施設園芸組合元組合長	メロン（トロ箱栽培）専作	平成26年11月
Y氏 (20歳代)	在宅 Uターン	認定農業者	水稻＋肉用牛＋メロン	平成28年8月
S氏 (30歳代)	在宅 Uターン	農業士	肉用牛＋露地野菜	平成28年8月

(3) 美味しまね認証の団体認証取得による栽培意欲の醸成

平成28年7月に生産組合員10名中5名が団体認証を取得した。認証を取得したことで、生産組合員の栽培意欲がより一層高まってきている。現在、残り5名の早期の認証取得に積極的に取り組んでいる。



図3 美味しまね認証書交付式



図4 メロン試食販売

(4) 地域の活性化と未来の後継者の育成

メロンの出荷式や収穫体験、肉用牛の共進会に地元小学生が参加することで、生産農家の意欲向上や地域の活性化に繋がっている。こうした取り組みを通じて、将来のメロン栽培の後継者あるいは地域農業の担い手が確保されることを期待するものでもある。



図5 メロン収穫体験

4 今後の普及活動に向けて

- 産地の今後の方向性の検討
 - ・一層の発展を目指した産地ビジョンの策定と地域への周知
- 担い手の確保・育成
 - ・新規就農者のモデル農家としての育成
 - ・新パッケージ（研修受入農家、住居等）の策定
- メロンの安定生産と温泉津メロンのPR
 - ・ICTを駆使した生産・指導システムの構築
 - ・GAPの取り組みの充実と消費者へのPR